

アンドレス・オッペンハイマー著、渡邊尚人訳「ラテンアメリカの^{きょういくせんりやく}教育戦略—^{きゅうせいちよう}急成長する^{しんこうこく}新興国との比較」時事通信出版局 2014年12月10日刊を読む

先を見なければならない

<私たちは世界一長い休暇を取っている>

1. (1)アジアの若者は、ラテンアメリカの若者より知能が高いのだろうか。
(2)なぜ、国際学力調査でラテンアメリカ人より良い成績を取れるのだろうか。
(3)専門家たちは何十年もの間、アジアの子供たちの学力が優れている理由は、孔子の時代から受け継がれている家庭内の教育文化にあるのか、それとも最良の教育システムにあるのか解明しようと試みてきた。
(4)その結果、単純な結論が導きだされようとしている。
(5)その結論とは、アジアの子供たちは休暇が少ないのでよく勉強する、という結論である。
2. (1)年間授業日数は、日本 243 日、韓国 220 日、イスラエル 216 日、オランダ 200 日、タイ 200 日、米国 180 日であるのに対して、ラテンアメリカ諸国では、祝日、「飛び石」連休、先生たちのストライキなどを差し引かなかったとしても、約 160 日である。
(2)年間の公式授業日数は、ウルグアイ 155 日、アルゼンチン 180 日、チリ 190 日、ブラジルとメキシコでは 200 日となっている。
(3)しかし現実には、これらの国の多くは 160 日に達していない。
(4)さらに、いくつかの州では 130 日にさえ届かないのである。
3. (1)これらの統計的数字だけで、発展が速い国は学校の休暇が少ない国であると結論付けるのは、少々単純すぎるように私には思われた。
(2)しかしながら、良い成績を上げる学生は他の学生と何が違うのかについて調査をしてきたジョンズ・ホプキンス大学の社会学教授カール・アレクサンダーの研究で、重要な点が明らかになった。
(3)アレクサンダー教授は、ボルチモア学区の小学校第 1 学年 650 人の児童の授業を何年間か追跡し、定期的に彼ら全員に対して行われる試験の成績を比較した。
4. (1)アレクサンダー教授は、「貧しい家庭の子供と裕福な家庭の子供は、1 年生では非常に似通った成績を上げていたが、時がたつにつれてその差が大きくなっていくこと」を発見した。
(2)「4 年生では、裕福な家庭の子供は貧しい家庭出身の子供を既に大きく引き離していた。どこが分岐点になったのか。」
(3)アレクサンダー教授は、「その差がつくのは、学校がある期間ではなく休暇中であること」を発見した。
(4)夏休みを終え新学期を迎えると、貧しい家庭の子供は、読解において、前学年終了時と同じか、それ以下の点数を取る。
(5)「だが、裕福な家庭の子供の読解レベルは 52.49%も上がること」が、調査によって明らか

になったのだ。

(6)「なぜなら、金持ちの親たちは、読解やその他の宿題を与える夏期コースや青少年キャンプに子供たちを送り込むからである。」

(7)「つまり、裕福な家庭の子供と貧しい子供たちとの差は、夏休みの間に学んだかどうかの結果だった」のである。

5. (1)「私たちは、学校の問題をまったく別の側面から見ています。」

(2)マルコム・グラッドウェルは、最近刊行された彼の傑出した著書『天才！成功する人々の法則』（講談社、2009年）の中でこう書いている。

(3)「私たちは、1クラスの児童数を減らすべきか、授業計画を再作成すべきか、児童一人ひとりに新しいノートパソコンを与えるべきか、学校の予算を増大すべきかについて議論するために膨大な時間をつぎ込んでいます。これらの議論はすべて、学校の機能に何か基本的な誤りがあると考えてのことです。しかしながら、学校で起きていることを、年度を通じて見てみれば、学校は機能していることがわかります。遅れを取っている児童にとっての唯一の問題は、**授業日数が十分でないことです**」

6. この主張を受け入れるのであれば、ラテンアメリカの子供たちが国際学力調査でこれほど低い点数を取る主な要因の一つは、**授業日数が非常に少ないこと**である。

7. ラテンアメリカの年間平均授業日数より授業日数が60日以上多いアジアの生徒たちがはるかに良い点を取っているのであれば、**子供たちの成績と就学期間の長さの間には直接的な関係がある**ことを否定できない。

<中国の子供たちは1日12時間勉強する>

8. (1)しかし、**年間の授業日数が多いだけでなく、アジアの若者たちは、毎日長い時間、勉強している。**

(2)以降の章で述べるように、本書を執筆するために中国、インド、シンガポールを調査した旅行において私が最も強い印象を受けたのは、夜間に学習指導を行う私塾の存在だった。

(3)子供たちは放課後、塾へ行って夜遅くまで勉強する。中国の数百万人の子供たちは1日12時間から14時間勉強している。

(4)非常に驚いたのは、私が「なぜ塾に通っているのか」と尋ねた子供たちの多くが、学校での成績が悪いどころか、優秀な生徒であったことだ。

(5)大半の子は、良い中等学校や大学に入学するために、夜間の塾に行っていたのである。

9. (1)訪れた塾のすべてで、私は子供たちに、普段の1日の生活の様子を教えてほしいと頼んだ。

(2)多くの子は、朝の7時半から午後の3時半までは学校に行き、放課後は午後4時半から5時まで学校で特別クラスを受け、その後私塾に通い、夜の8時、9時、あるいは10時まで勉強していた。

(3)これは事実である。

(4)私は自分の目を見たのだから。塾では、子供たちが自分の机で勉強していて、たいてい早朝に家を出た時に着ていたのと同じ学生服を着ていた。

10. (1)ラテンアメリカがここ数十年で教育をかなり普及させたことは、称賛すべきことである。
(2)しかしながら多くの国では、学校を増やすのではなく授業時間を短縮することによって、既存の学校でより多くの生徒を受け入れるようになった。
(3)量と質の両方に投資するのではなく、量だけを取ったのである。
11. (1)アジアとラテンアメリカの授業時間の差は、ラテンアメリカ諸国のスキャンダルともいえるものだろう。
(2)しかしながら、教育の遅れを国家の政治的な議題とする国は少ない。
(3)その理由は何か。私たちは過去を見ながら生きているからである。

P.14 ~ 17

<コメント>

今日は4月1日、2016年度の初めの日であるので、ピューリッツァー賞受賞でマイアミ・ヘラルド紙のコラムニスト、アンドレス・オッペンハイマー氏の「ラテンアメリカの教育戦略」をご紹介します。日本語訳もある「米州救出」の著者のオッペンハイマー氏は、本書でも数年かけた膨大な調査の下に、ラテンアメリカ諸国と急成長する新興国を比較しながら、ではどうしたらよいかを具体的に提言。引用した学習時間の長さの中国との比較などは極めてわかりやすい。では、日本ではどうしたらよいか。ご一緒に考えたい。

— 2016年4月1日(金) 林 明夫記 —